

かゝるもの認め、殊に産報運動の發生に重大なる關係
あり、また現在勞働階層の反對も多いから、さうろ解体
して新團體の成立を計ることを希望するといふにある。
しかし職員の練達と事業の有益、協調會が産報の統合計
畫に反對した獨自の立場、戦後に處した幹部の努力、職
員の續勤と事業の續行等を擧げて、全面的にこれを見認
したのであつた。

この懇談に對して、もちろん種々の意見はあつたが、
理事會は大局に考えてこれを受入れることに決した。こ
かし本會廿七年誌を編集し終つて、その成立と性格、殊
に協調主義の本旨、産報運動の指導性、ならぬに解説決
定前後の真相などについて、なお解説を加え、後人とし

て誤解をからしめる必要あることを感して、こゝに本篇
を草する。その前に一言しておきたいことは、歴史の進
化ということである。世界史でも日本史でも、民族の生
態を内包とした絶えぬ進化によつて成立する。本本の
近代國家としての成立も、今なお未熟なる進化の途上に
ある。申すに改米が數千年少くとも數百年間における民
族生活の経験によつて歸納し得た人權乃至勞働權の思想
とその社會的組織とを定規として、わがくに萌芽を發し
た大正昭和におけるわが民族の近代的社會生態と、その
まゝに尺量批判することは、歴史の矛盾に外ならぬとい
ひある。

協調會は、大正八年に創設されたのであるが、當時國